

説経祭文『三庄太夫』の敬語

ゴザル・ゴザリマスについて

水野 恵子

〔キーワード〕 説経祭文 ゴザル ゴザリマス さんしょう
太夫 若松若太夫

はじめに

説経は江戸時代初頭寛永初年（一六二四）、胡弓や三味線
を伴奏楽器に人形を操り、舞台でも演じられるようになり人
気を博した。そして説経台本も絵入り読み物として出版され
るのである。しかし説経は江戸初期の隆盛の後、次第に浄瑠璃に
圧倒されてしまうのだ。説経の語った哀切な物語は新興の浄瑠
璃や歌舞伎に幾多の題材を提供するものの、舞台での座を奪わ
れてゆくと。その後の説経は法螺貝や錫杖を持って門付けを
したり、庚申講などで語る山伏の「祭文語り」の中で細々と続
いていった。江戸後期、寛政（一七八九）のころに説経は復
活を見るが、それはこの山伏の「祭文」を受け継いだ「説経祭
文」といわれるものだった。復興の功労者は江戸本所に住む初

代薩摩若太夫である。現在演じられる説経は、この説経祭文の
流れを引く薩摩派のものが多く（注1）。
本稿はこの江戸後期の説経祭文正本の敬語ゴザル・ゴザリマ
スを中心に考察したものである。

〔注〕

1 「説経」については『和辻哲郎全集』第一六巻「歌舞伎と
操り浄瑠璃」（岩波書店 一九六三年）、室木弥太郎「語り
物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究」（風間書房 一九六五
年）、荒木繁・山本吉左右「説経節」（東洋文庫 平凡社
一九七三年）解説、佐々木八郎「説経」（「語り物の系譜」
笠間書院 一九七七年）、室木弥太郎「説経集」（『新潮日
本古典集成』一九七七年）解説、「特集・多摩の説経節」
（『多摩のあゆみ』八〇号 たましん地域文化財団 一九九
五年）等の諸論考を参照した。

1 説経正本のゴザル、ゴザリマスなど

説経正本で最も古い刊記のあるものは寛永八年（一六三一）刊「せつきやうかるかや」である。古来の説経の特色を強く残した初期の説経を「古説経」と呼ぶが、これには「せつきやうかるかや」の外、寛永一六年（一六三九）ころの版本「さんせう太夫」「せつきやうしんとく丸」や絵巻「をくり」、明暦二年（一六五六）刊「せつきやうさんせう太夫」等が挙げられる。そうして、この後の正本で万治（一六五八）以降のものになると、浄瑠璃の影響で章段を六段に分け、また語りの内容や言葉にも変化が著しくなり、「説経浄瑠璃」と呼ばれるようなものへと変わってゆく（注1）。

「さんせう太夫」の諸本でも変化は明らかに見える（注2）。私の調査した敬語ゴザアルでは、初期説経で多用されたものが、後には減少するという変化がある。

「さんせう太夫」は右に挙げた①寛永一六年（一六三九）ころ刊説経与七郎正本と②明暦二年（一六五六）刊佐渡七太夫正本は三段構成の古い形式を持ち、③寛文七年（一六六七）太夫不詳本、④正徳三年（一一七三）佐渡七太夫豊孝正本は浄瑠璃と同じ六段構成になっている。この四本のゴザアル・ゴザルを比較してみると、①②に対して③④で急速に数を減らしていることが分かる。ゴザアル・ゴザルの用例数は（与七郎本 四六例・四例、明暦版 四二例・三例、寛文版 一二例・〇例、正徳版 九例・一例）のようになる（注3）。説経の場合は狂言のようにゴザルが古いゴザアルに代わって勢力を持つような

変化（注4）を見せないうちに両者ともに力を失う。このことについては別稿にまとめたいと思う。

ゴザアルは現在の丁寧語、また美化語、丁寧語（注5）とされる敬語ゴザイマスにつながるものでその展開は興味深い。

ここではテキストとして荒木繁氏翻刻の説経祭文「三庄太夫」を使わせていただいた（注6）。氏はこの正本を二代目薩摩若太夫が文化七年（一八一〇）前後から文政（一八一八）にかけて出版したものではないかとされている。またこの正本の特色について氏は昔の説経正本と比べて古説経の持つ言葉の衝撃力を失い、平板で説明的になり、素朴で切実なものが失われていると解説中で評された。

この点ではまた別の面からみると前代の正本に比べて、いかにも新しくなったという印象も否定できない。前代の説経の単純でくぐもったイメージが消え、ぱっと風通しがよくなったような感もあるのだ。

このような印象の理由も考えながら、次に敬語ゴザル・ゴザイマスについて見てゆきたいと思う。

〔注〕

1 横山重「説経正本集」一・二・三（角川書店 一九六八年）解題、室木弥太郎「せつきやう」研究の展望Ⅴ（『文学』一九七四年九月）、伊東龍平「さきをいつくとおといある」説経正本における常套句について（『国語国文』一九

六〇年一〇月）、徳田和夫「説経説きと初期説経節の構造」

（国文学研究資料館紀要」第二号 一九七六年）

- 2 佐野みどり「浄瑠璃さんせう太夫物の系譜」（『伝承文学研究』一九八三年一月）、酒向伸行「山椒太夫伝説の研究」名著出版 一九九二年 二五―三六頁）

- 3 横山重「説経正本集」一の本文によった。したがって①与七郎本「さんせう太夫」は欠丁のあるままのものである。

- 4 狂言では江戸時代初期、大蔵虎清校訂の正保二年（一六四五）大蔵流台本「虎清本」ではゴザアルの古形が残されているが、寛永一九年（一六四二年）書写の「虎明本」ではゴザアルに対して、全体的にはゴザルの例が圧倒的に多くなる。

- ゴザアル・ゴザル両者ともに尊敬表現よりも丁寧表現が主流である。ゴザアルはこの後急速に勢力を弱めたらしく、元禄ごろの「歌舞伎狂言集」にはゴザルだけを見えるというような状況になる。ハ蜂谷清人「狂言台本の国語学的研究」（笠間書院 一九七七年 二〇―三四頁）、林田明「古本狂言文の詞章―虎清本と虎明本―」（『近代語研究』第二集 一九六八年）、小林賢次「言語資料としての天理本「狂言六義」―ゴザアル・ゴザル、マラスル・マサル、サラバ・ソレナラバの分布から―」（『近代語研究』第八集 一九九〇年）
5 辻村敏樹「いわゆる敬讓の助動詞について」（『国語学』七二号）、敬語の分類の問題点をめぐって」（『敬語論考』明治書院 一九九二年）、宮地裕「現代敬語の一考察」

（『国語学』七二号）

- 6 荒木繁「説経祭文「三庄太夫」」（一）（二）（和光大学人文学部紀要第二六、二七号 一九九一年、九二年）説経祭文「三庄太夫」（和泉屋永吉版、森屋治兵衛共版）を吉田屋小吉版により補訂された本文である。

2 ゴザル・ゴザリマスの用例

次に本文の例を挙げる。文中にはゴザル・ゴザリマス・ゴザアソパスがある。

これらの語で地の文に用いられた例はなく、全て会話の中にある。（引用文は翻刻一・二巻の何頁のように記した。）

I 動詞の用法

ゴザルは全部で二七例ある。（ゴザナイ三例を便宜的に含めた。）ひらがな表記の「ござる」二二例、漢字を使った「御ざる」五例である。ゴザリマスの例は五四例ある。「ござります」表記が四二例、「御ざります」が一二例、外に「御座ます」とあるものが一例ある。

〇うは竹。畏まりまして御座ますと。かしこの家にはしり行く。（一四頁）

ゴザマス等と読む可能性もあり、ゴザリマス用例数から除く。本文ではゴザイマスの例はなく、右表記の一例以外はゴザリマスである。

(1) 「居る」の意味

ゴザルは一例しかない。面前の御台所を話題にしているので尊敬の例である。

○ばいまいもどつた。これにござるたびのしうに。こよひ一ち夜。後せうのおやどをまいらする。(一八頁 山岡太夫↓妻)

ゴザリマスは二例ある。尊敬ではなく美化語である。

○やまはまともに。くはんじんをいたすものとは。たゞのひとりもござりますまい。(二四頁 三郎↓三庄太夫)

(2) 「有る」の意味

次の例は話手自身のことを用いたり一般の物言いを丁寧にする美化語である。ゴザルに四例、ゴザリマスには八例ある。

○コレ老母ちとそなたに尋たい事がござる。(二三〇頁 聖↓老女)

①其様なじやけんな者にいつ迄もつれそうておる事は有りそふもないものじやと。さだめし思し召も御ざりませうが。(一九頁 山岡妻↓御台所)

②イヤおまちぐたされ御らうしん。此行きさきにてらは御ざりませぬか。(二二頁 対王丸)

③あなた様を。おみかけ申て。一トつのお願がござります。(二二三頁 安寿↓治郎)

①は話し相手に属することにいう。このような例は二例あるが相手自身のことをさす用例がないので、特に尊敬としなかつ

た。②③は特に尊敬としなくてもよい物や自称についての例だから美化語である。

(3) 「行く」の意味

ゴザルに三例ある。次の(4)とともに軽い尊敬である。

○おふぎが櫛といふて。ひろい。はしがござります。あれへ。御ざつて。今よい。一ち夜を。あかさつしやれい。(一五頁 浜女郎↓御台所)

(4) 「来る」の意味

ゴザルに四例ある。そのうちシャルが付いた例も二例ある。尊敬はゴザルだけでは不足の感があるのだろう。

○サアく御ざれとさきに立ち。(一一頁 山岡太夫↓御台所)

○アレばくけふの寒さもおいとひなく。国分寺のお聖様がくはんけにござらしやつた。(二三〇頁 老人↓妻)

「行く」「来る」の意味のゴザリマスの用例はなかった。

補助動詞としての用法

Ⅱ 形容詞・形容動詞に付く

ゴザルにはなくゴザリマスの用例のみである。形容詞に四例ある。対称への用法も丁寧な丁寧語と考えてよいと思う。

○時々ちがひでおたゝせ申し。ろくくおよるまもなく。さだめしおねむう御ざりませう。(一一頁 山岡太夫↓御台所)

形容動詞には二に付く場合(一例)とデに付く場合(四例)

がある。

○人トめをしのぶ旅のそら。御きうくつにはござりませうが。やはり是なるかはごへと。(二二八頁 聖↓対王丸)

○たてなは横なは解ほぐし若きみをいだし。嘸御きうくつでござりましたろう。(二二八頁 聖↓対王丸)

様態的推量の形容動詞のように働くやウニ・ゲニに付く例が三例ある。

○なるこのつなを引かせ。繫糖をついばみまする小鳥をおはせ置きまするやうにござります。(二四〇頁 庄屋↓対王丸)

○とびや鷲。瘦たる犬のはらをこやしてやるならば。祭日の斑徳じやと申まして。亡骸は構のやぶへ打捨ましたげにござります。(二三二頁 老女↓聖)

(3) 助詞テとともに用いる(テゴザル・テゴザリマス)
接続助詞テに付いた例で、ゴザルに三例ある。テゴザリマスの例は全部で一六例だが、全てが丁寧語マスに上接したマシテゴザリマスの形である。挨拶の決まり文句として「かしこまり奉りましてござります」(三例)、「かしこまりましてござります」(一例)、「こころへましてござります」(二例)は、非常に丁寧な感じがある。三郎も父の三庄太夫に対してはゴザリマスを用いて、ゴザルは使わない。自称のことに七例、他称のことに用いた例が九例ある。

この言い方は動作・作用が終わった結果が状態としてであると

いう婉曲な表現法になっている。

○其わつばとやらが行く衛はしれましてござるかな。……シテく其信夫が亡骸はいづれの寺へのべのおくりをいたしてござるな。(二三〇頁 聖↓老女)

○申父上様々女郎めもはやこねましてござります。たゆふは聞いて。ナニ三郎女郎めがこねた。なさない事いたした(二二〇頁 三郎↓三庄太夫↓三郎)

○わつばが行く衛を白状いたさぬと申まして。ほうろくの罪とやら申ます。火責にかけて責ころしましてござります。(二三〇頁 老女↓聖)

(2) ニとともに用いる(ニゴザル・ニゴザリマス)
断定の助動詞ナリの連用形ニに付く。ゴザルは別れの挨拶「さらばにござる」のみで二例、ニゴザリマスは一例ある。

○さらばに御ざる山おか殿。(一〇頁 御台所↓山岡太夫)
○ここがうき世に御ざります。もとよりじやけんの山おかゆへ。とふから心を見かざりて。けうはいとまのうとらん。あすはりべつをいたさんと。(一九頁 山岡太夫妻↓御台所)

(2) デとともに用いる(デゴザル・デゴザリマス)
断定の助動詞ダの連用形デに付くものである。ゴザルに八例、ゴザリマスに一〇例ある。

○かく見ぐるしい我でらへ。御本陣を申しつかるといふ事は。一ちあん合点の行かぬ事ではござらぬか。(二四一頁

聖↓庄屋)

○総領は大郎広義。次男が次郎広次。三男三郎広玄。これはわたくしがかりむすこでござります。(二46頁 三庄太夫↓対王丸)

ほとんどが自称・自分側のことをいうときのデゴザリマスである。老女の語りの中で話題の安寿姫のことで、

○其わつばに信夫と申まして一ト人の姉がござりましたが。年は十六夫れはくみめ美しき生得でござりましたが。

(二30頁 老女↓聖)

という他称の例は一例だけであり、これもイラッシャルの意の尊敬ではなく聞き手への敬意に基づく丁寧語とする。打ち消しのヌでは「デハゴザリマセン」とン表記になった一例があった。

○申たびの衆あなたがたをおこしましたはべつでは御ざりません。(一13頁 山岡太夫↓御台所)

(5) デヤとともに用いる打消しのゴザナイ・ゴザリマセヌ

断定の助動詞ダの連用形デに助詞ハが付いた語の転で六例ある。

○鳥さしどころじやござない。(二10頁 三郎独言)

○やどかすものなきゆへに。ぜひなく是れにて一夜をあかすとおつしやつたじやござりませぬか。(一7頁 山岡太夫↓御台所)

III ゴザアソバス(1例)

○是はしたり若君様とした事が。何こしに姉上様が三庄

太夫がもとにござ遊さふ。(二44頁 聖↓対王丸)
イラッシャルの意味で敬意の高い尊敬語である。

以上の用例を考えるにあたり、江戸時代のゴザル・ゴザリマスについてまとめてみると、元禄のころはこの二語を含めたゴザル系の敬語が全盛期を迎えていた。ゴザリマスはゴザルより敬意の高い言葉で、江戸前期上方で「ござります」は第一敬語段階の対称の「お前段階」、「ござる」は第二段階の「こなた段階」に使われている(注1)。江戸後期でもゴザリマスは勢力があるが、新しく発生したゴザイマスより丁寧で改まった語として使われたらしい。ゴザルはこの期には医師・武士や町の老人などの言葉として現れ、一般の町の人々はこれを用いなくなったようだといわれる(注2)。

江戸後期のこの「祭文」のゴザル・ゴザリマスについては、右の事情に合致している。ゴザルの例はゴザリマスの半数程度で全体に少なく、形容詞・形容動詞に付く例もなく使用範囲が限定されている。話手は御台所、安寿が慣用句「さらばにござる」を使った外、女性には浜女郎、御台所に各一例だけである。山岡太夫六、聖九、三郎三、老人二、山岡甥一、公卿一、村人一で話手はみな男性である。尊敬用法はわずかにあるものの敬意は高くない。

ゴザリマスは一般的で使用例も多いが、存在の意で人物に対するものは見えず、いずれも美化語、丁寧語の用法と考えられる。これは現代語のゴザイマスに近い状況である。

打消としてはゴザラヌが三例ある。室町時代末ごろにはゴザラヌ、ゴザナイに尊敬と丁寧の使い分けが問題になり(注3)、江戸前期資料でゴザナイ、ゴザラヌ両者共存の場合には尊敬語としての用法はゴザラヌが受け持つという指摘がある(注4)。ここでのゴザナイ、ゴザラヌは全て美化語、丁寧語としての用法である。ただしゴザナイは三例全部が三郎の独言や罵る言葉にあり、くだけた卑俗の感があつたようだ。やはりこれはゴザラヌがあるので、使い分けが生じるのだろう。

○其よふなものをかくまいなぞいたしたおぼへけつして御ざらぬが。(二二三頁 聖↓三庄太夫)

○はい取りぐもめがにろつとでる。おのれにやようはござないと。(二二四頁)

〔注〕

- 1 山崎久之「江戸前期上方の待遇表現体系」(『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院 一九六三年 一〇九頁)
- 2 湯沢幸吉郎「江戸言葉の研究」(風間書房 一九六〇年 二〇四〜二〇九頁)
- 3 大塚光信「エソボ物語」補注(角川文庫 一九七一年 一二二〜一二四頁)
- 4 小林賢次「版本狂言記におけるゴザル・オリヤル・オヂヤルとその否定表現形式」(『近代語研究』第六集 一九八〇年)

3 若松派「鳴子の歌・親子対面の段」との比較

現在、現役の説経演奏家として二代目若松若太夫師(東京都指定無形文化財保持者。現武蔵大塚)がいる。師は寛政期復活の薩摩派から分かれた若松派にあって、父の初代若松若太夫とともに、幼少のころから演奏活動を続けてきた。現在民俗芸能として伝わる説経節の多くは、薩摩若太夫の説経祭文を源流とするその若松若太夫の説経につながるらしい(注1)。

今の若松派説経節は明治時代、薩摩辰太夫(本名漆原四郎次、後に日暮竜ト。文政六年(一八二三)〜明治二八年(一八九五))が薩摩派版行の正本をもとに詞や曲に改訂を加えて作ったものだという(注2)。

そこで次に若松派の改訂を経た「さんしょう太夫」の一場面「鳴子の歌・親子対面の段」(注3)を先の薩摩若太夫の「祭文」の「卅一 母対面乃段上下」と比較してみることにする。若松派「さんしょう太夫」では段の題名を変えたりしているが、内容的にそれほど大きな違いはない。全体に事柄に説明的で詳しいのが若松派の方で、人物の会話も若松派「鳴子の段」の方が長くなっている。実際には「祭文」も若松派正本もその時々舞台上に応じて緩急自在に演じたものであろうが、ここでは両者とも文章となったものを比較することしかできないわけである。

明治の若松派正本（以下「若松」と略記）でも伝統的語り物の古めかしい言葉が多い。

馬^{うま}に召^よされ縋^{すが}いつ／急^いいでこれへ出ませい／まろはその小唄^{こたがひ} 所望^{しやうぼう}じゃ／町^{まち}にこれにて囃^はらかに、何^{なん}とぞ囃^はかせたびたまへ

しかし、ゴザリマスについていうと、「祭文」との間に大きな違いがある。（ゴザルは両者でない。）

「若松」にゴザリマスが一、二例あるのに対して、「祭文」の当段は一例のみで、「若松」のゴザリマスには「祭文」の「候」一例の外、残り一〇例は当たる言葉がない。次に二本の比較を挙げる。領主となった対王丸に対し、村役人が殷勤な言葉遣いで説明をするところである。

「祭文」おそれながらおこくしゆさまへ申上^{まう}ケます。あれは今日^{けふ}日^ひおこくしゆさまの。御本^{ごほん}ちんを仕^{つか}ります。そとがあふの次郎^{じらう}。…二人の老母^{らうぼ}をかいとりましたところ。一人は大海^{たいかい}へ身をなけます。…今一人はわが子にこれが。ついに町^{まち}に眠^ねなきつぷします。…次郎^{じらう}眠^ねしよちなす。ハッたんのあはのはたけへおひいだし。…小^ことりをおはせおきますやうにござります。（二三八頁）

「若松」ハイ／あのほうやらほうでござりまするかあれは御殿^{ごてん}様の御本^{ごほん}陣^{じん}、外^{ほか}が谷^や村^{むら}の次郎^{じらう}右衛門^{ゑもん}が召^よし抱^かえのばでござります。…買^かい取りましたそうでござります。…山^{やま}椒^{から}太^{たい}夫^{ふう}に買^かい取^とられたそうでござります。…人^{ひと}は海^{うみ}

中^{ちゆう}に身を投^なげて 怨^{おん}讐^{しゆう}になつたそうでござります。町^{まち}に眠^ねなきつぷしますナ…この往^い還^{わん}づき巴^は返^{へん}ぶりは 次郎^{じらう}が持^もち分^{ぶん}でござります。…小^こ鳥^{とり}を追^おうのが ばばの役^{やく}目^めでござります。（七三頁）

「祭文」ではゴザリマスは最後に一度出てくるだけである。

江戸時代にはマス（ル）だけでかなりの懐^{ふく}んだ気持^{きもち}を表^{あらわ}せたのだ。「若松」は語句の一々にゴザリマスなどを使^{つか}っている。そして「若松」の文章ではゴザリマスよりゴザイマスの形で出ている例が多いことに注意される。（四対八）また古いゴザリマスル、ゴザイマスルの形もある。（ゴザリマス 二、ゴザリマスル 一、ゴザリマスルカ 一、ゴザイマス 七、ゴザイマスル 一例）また断定の二に付く例「づし王丸^{おうがん}にござります」（二例）やゴザリマスルは、用例からゴザイマスよりも改まった語として使い分けているようだ。「祭文」ではゴザリマスだけで新しいゴザイマスの形はなかった一方、また古いゴザリマスル^ルの形もなかったのから、明治の若松派は新旧取り混ぜて文体を作っているのだ。

江戸後期は位相上の差別や変遷の激しさに伴って、対者待遇語が発達した時代である。マス・ゴザル系敬語の勢力があるが、また本来の語形から多くの派生形が生まれている。たとえばゴザル系でもゴザル、ゴザリマス、ゴザイマスの外にゴザリヤス、ゴザリンス、ゴザヘマス、ゴザエヤス、ゴゼス、ゴイス、ゴンス、ゴッス等々たくさんある（注4）。「祭文」は語り物の

詞章でやはり広義の文語文章に属するから、現実の多様な口語をそのまま使用はしていない。しかし口語世界の傾向は反映しており、当段のマスとゴザリマスは「祭文」で一例と一〇例ある。これが「若松」は一二例と二〇例のように多くなり、「若松」のゴザリ(イ)マス(ル)の多用は近代口語中のマス使用の増加に伴った現象であることが分かる。

〔注〕

1 荒木繁「説経祭文「三庄太夫」」(一)解説

2 板橋区教育委員会「若松派の説経師を創出した説経師たち」(「説経節と若松若太夫」文化財シリーズ第七四集 一九九三年)

3 テキストは右の書の「さんしょう太夫」本文によった。

4 山崎久之「統国語待遇表現体系の研究」(武蔵野書院 一九九〇年 四九八―五〇〇頁)

4 まとめ―説経祭文「三庄太夫」の特色

「祭文」が出版された時代は、江戸後期も後半部に入る化政期で、文学の享受層が拡大した時代である。寛政の初代薩摩若太夫は江戸薩摩座等に出演し説経は再び盛時を迎えるのだが、この復活も長く続かず人気の衰えに江戸府内を追われるようになる。そして五代薩摩若太夫(一八一―七七七年)のころには

次第に江戸近郊一帯に活動の場所を移してゆくのである。薩摩辰太夫(日暮龍卜)もそのような流れの中で、現在の埼玉県騎西町に住み弟子を育てた。江戸のはなやかな町を去った説経は農村に広く伝播し、明治時代まで好んで演じられた。東京都多摩地方における薩摩派説経は、十代目薩摩若太夫の後継者たちに継承されている(注1)。昔の江戸近郊各地にはまだ演奏家の正本が残っており、かつての流行をしのばせる(注2)。

初代薩摩若太夫は本所の米屋出身であり、後の家元も商業を兼業したから、説経の詞章も町民、農民聴衆の意識に合うものになっただろう。「祭文」の会話に揶揄や反論、また罵り、卑猥、滑稽の語が多出することに注意すべきだと思う。罵り語としては次に示すようにいろいろある。

じやまをひろぐ(する)／どぶさつた(寝た)ざまを見ろ
／ぶつたくる(取り上げる)／ぼいこんで(放り込んで)
／ナニ三郎 女郎めがこねた(死んだ)／水ヲへつぱいり
(入り) あつたらいのちをぼうにぶつたるばゝめ／ほへず
(泣かず)とそこにまつてけつかれ(待て)

また時として聴衆の緊張を解いて笑わせる滑稽、冗談も交じる。

はつと答でお灘酢(かこかき)。おらがおだんな(梅津大納言)きまくれだ。おら此年迄かこかき。あまたの殿様かついたが。こじき(対王丸)をかづぐは今は初(二三四頁)中には嗜虐や卑猥に過ぎるものもあり、聴衆への狙いが過度

で品の悪いところもあるが、これが復活説経を支えた本来の祭文の特質であり、この単俗性、庶民性はのちの浪曲にもつながってゆく。祭文は民衆との接触の深い山伏修験が滑稽諧謔を入れて聴衆を楽しませながら、神仏の靈験功德を語ったものである。説経もかつて泣き節といわれたような、物語に感情移入して涙しながら語るだけではなくなっている（注3）。

『祭文』では単純な繰り返しを目立たなくしている。初期説経には暗唱した「口語りの単位」——決まり文句を適宜つなぎ合わせた語りの文章が基礎にあり（注4）、決まり文句の繰り返し（注5）が特徴だったが、説経浄瑠璃ではそれが次第に消えていったのである。が、先に比較した『さんせう太夫』四本中で後の二本はむしろ舞台用により文語的に整えられていったもののようにだった。文語的敬語（サ）セタマフ・タマフについては、①与七郎本、②明暦版の各約二〇例（注6）が、③寛文版、④正徳版では約一四〇例に増加するが、『祭文』では八〇例程度に抑えられる。『祭文』とはほぼ同じころの口語を反映している『浮世風呂』『浮世床』（一八〇九—一八三三年）には庶民の丁寧な言葉遣いの中に多くのゴザリマス、ゴザイマスを見ることが出来る。舞台語の狂言でも、ゴザル中心になった台本にまた新しい形のゴザリマス（ル）を取り入れるが（注7）、『祭文』もかつての説経がゴザアルをなくしていったのとは逆の態度で、口語のゴザリマスをかなり採用している。待遇表現が卑罵から尊敬にいたる幅の広さを持つことも、江戸前期の古説経とも後

の浄瑠璃化した説経とも違う現実味を感じさせる理由の一つになっという。

最後に現代の若松派正本の一端から時代に合わせた変改の跡を垣間見た。説経祭文「三庄太夫」は同時代の聴衆の厳しい評価にさらされ、生き残るためのいろいろな工夫が必要だったが、明治の若松派も同様だったと思う。

（注）

- 1 三隅治雄「説経節流転」、秋山治「説経節の遠近と歴史的地域の変遷と現状及び影響」（『多摩のあゆみ』八〇号）
- 2 筆者も編集に参加した『説経浄瑠璃 桜草語 浅倉当吾』（狭山古文書叢書第九集 一九九二年）、『説経浄瑠璃 芦屋道満大内鑑』（第十集 一九九三年）はそれぞれ埼玉県狭山市柳瀬、日高市新堀の旧家所蔵の正本によっている。
- 3 しかし若松若太夫師は、古典芸能継承者として本来の伝統的演奏法を現代に生かそうとしているようだ。（二代目若松小若太夫「自分が泣くからお客さんが泣けるんだ」『広報さやま』一九九五年七月）
- 4 山本吉左右「くつわの音がざざめいて」（平凡社 一九八八年）
- 5 「あらいたわしや、りゅうていこがれてお泣きある、先をいづくとお問ひある、いたまはれや、一の御誕なり」等決まり文句が多い。八室木弥太郎「せつきやう」研究の展望V

6 与七郎本の欠丁部分を補った『さんせう太夫』（新潮古典集成）では五九例になる。（藤掛和美「さんせう太夫」総索引『統国語学論考及び資料』国語懇話会 一九八三年／八七年）

7 寛政四年（一七九二）書写の「虎寛本」ではゴザアルはゴザルに統一されたが、また新しい形のゴザリマス（ル）が取り入れられている。△蜂谷清人『狂言台本の国語学的研究』（二七／三四頁）▽

要旨 説経祭文「三庄太夫」の敬語

ゴザル・ゴザリマスについて

水野 恵子

（キーワード）説経祭文 ゴザル ゴザリマス さんしょう太夫 若松若太夫

江戸後期の復興説経節の薩摩派は祭文との関わりが深かった。文化文政期に出た説経祭文正本『三庄太夫』のテキストの敬語ゴザル・ゴザリマスの用例ではすでに尊敬の意味は薄れ、美化語、丁寧語の用法がほとんどである。しかしながら、江戸初期の説経正本の調査では敬語ゴザアルは次第に消えていったのだが、説経祭文ではゴザル・ゴザリマスの形で、両方合わせるとかなり多く使われているといえる。これは当時の話し言葉の反映で説経を身近な演芸として再生するための試みであろう。現在、二代目若松若太夫師（現武蔵大塚）の語る若松派正本は薩摩派の流れをくむ。その「鳴子の歌・親子対面の段」を説経祭文の段と比較してみると時代に合わせた文体の工夫が見え、ゴザリマスも多用されている。